

平成 27 年度
横須賀美術館 運営評価報告書
(一次評価)

平成 28 年 (2016 年) 6 月

横須賀市教育委員会

美術館運営課

I 美術を通じた交流を促進する

① 広く認知され、多くの人にとって横須賀市を訪れる契機となる。

〔一次評価〕

達成目標	実施目標
S	A

【達成目標】年間観覧者数 100,000 人以上

〔目標設定の理由〕

- ・「横須賀市立美術館基本計画」（平成12年6月策定）では、他の公立美術館の実績を参考に、施設の規模、本市の人口などから年間観覧者数を10万人と推定し、開館後の実績としても初年度を除き10万人前後で推移しています。
- ・そのため当館では、まず観覧者目標を10万人以上とし、展覧会内容のバランスを考えながら展覧会を決定しています。
- ・観覧者の見込み数は、展覧会ごとの開催時期や過去に開催したターゲットの近い展覧会の実績などを勘案し算定しています。
- ・平成27年度は、これまで毎年達成すべき観覧者数としてきたミニмумライン10万人以上を達成目標とします。

〔一次評価の理由〕

- ・年間観覧者数100,000人という目標設定に対し、実績は114,861人となり、達成率114%と大幅に目標を上回ったことから、「S」評価としました。

	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
観覧者数	97,535 人	101,841 人	113,007 人	114,861 人

注) 美術館を利用した人の実際の姿を表すものとして、展示を観覧した人の数である観覧者数のみを表記することとしました。

展覧会名		観覧者数 見込(人)	観覧者数 実績(人)	達成率
企画展	生誕110年 海老原喜之助展	1,000	1,664	166%
	ほっこり美術館	15,000	21,783	145%
	ウルトラマン創世紀展	30,000	32,694	109%
	没後10年「長新太の脳内地図」展	18,000	23,367	130%
	横須賀製鉄所(造船所)創設150周年記念事業 浮世絵にみるモダン横須賀&神奈川	13,000	8,705	67%
	第68回児童生徒造形作品展	15,000	13,646	91%
	嶋田しづ・磯見輝夫展	6,000	7,161	119%
	所蔵品展のみの期間	6,000	5,841	97%
合計		104,000	114,861	110%

【実施目標】

- ・ 様々な広報媒体の特性を生かして、効果的な広報活動を実施し、交流を促進する。
- ・ 各種イベントを開催し、展覧会以外の要因での利用を増やす。
- ・ 外部連携を推進し、様々な機会と場所を捉えて、美術館の情報を発信する。
- ・ 旅行会社などへの働きかけを通じて、団体集客を促進する。
- ・ 商業撮影の受入と誘致を推進し、美術館のイメージアップを図る。

〔目標設定の理由〕

- ・ 横須賀美術館は、本市の貴重な都市資源であり、これを有効活用することは、本市のシティセールスや交流都市の推進という観点からも重要になります。
- ・ 市内外に積極的に情報を発信して広い層に魅力をアピールすることで知名度や認知度を向上させていくことが必要と考え、実施目標として設定します。
- ・ 広報、パブリシティ活動にあたっては、当館の利用者層や展覧会ごとのターゲット層に応じた効果的な広報を実施します。
- ・ そのために、様々な広報媒体をその特性を踏まえて効果的に活用し、特に若い世代に対しては積極的にツイッターなどのSNSを活用していきます。

〔一次評価の理由〕

- ・ 無料ででの情報掲載数、ツイッターのフォロワー数、商業撮影の件数等が目標を上回ったため、評価ができるものと考えて「A」評価としました。

《広報・集客促進事業》

展覧会、イベント、ロケーションなど横須賀美術館の魅力をフル活用し、横須賀の交流拠点として集客に取り組んでいきます。そのために、企画展情報だけでなく、美術館の総合的な魅力や外部との連携による地域情報を積極的に発信していきます。

(1) 訴求活動による集客促進

- ・パブリシティを期待した新聞、雑誌等への展覧会リリース
- ・新聞、雑誌等の無料での情報掲載数は 227 件となり、目標の 220 件を達成することができました。

(単位：件)

媒体	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
新聞	42	53	63	53
雑誌	52	64	85	55
Web	35	21	34	26
フリーペーパー	35	47	62	57
書籍	7	10	7	4
会報誌	14	5	8	8
TV	16	13	16	12
ラジオ	6	1	6	6
その他 (カタログ等)	0	1	4	6
合計	207	215	285	227

- ・広報よこすか等他部局の広報媒体を活用した情報発信
⇒毎月の広報よこすかへの展覧会情報、美術館のイベント等の掲載
- ・公共交通機関への広告掲出
⇒京浜急行線 駅貼り（2 週間）5 回、窓上（4 週間）5 回
※ 児童生徒造形作品展を除く各企画展で実施
⇒東急東横線 窓上（1 ヶ月）1 回
※ ウルトラマン創世紀展で実施
⇒京王線 新宿駅・渋谷駅など駅貼り（会期中随時）3 回
※ ほっこり美術館、ウルトラマン創世紀展、嶋田しづ・磯見輝夫展で実施
- ・美術系雑誌やタウン紙等、有料での情報掲載
⇒美術系雑誌での広告 芸術新潮 1 回
※ 嶋田しづ・磯見輝夫展で実施
⇒タウン紙等での広告
タウンニュース、情報誌 ぱど、まみたん、旅サライなど 計 8 回
※ 長新太の脳内地図展、嶋田しづ・磯見輝夫展などで実施
- ・ホームページ、ツイッター、フェイスブックを活用した情報発信
⇒ホームページは随時更新しています。
⇒美術館公式ツイッターの運用状況
フォロワー数は昨年度末 2,338 人より約 1,700 人増加しました。

【参考】平成28年3月31日現在 フォロワー：4,054人、ツイート：2,238回

※ ツイッターは平成24年9月29日より運用開始

⇒フェイスブック運用開始

(谷内六郎館7/31～、横須賀美術館9/9～)

SNS毎の特性を生かした情報発信に努めていきます。

・インバウンド推進の第一歩としての英語版パンフレット作成・配布

⇒米海軍横須賀基地への効果的な配布方法・時期を検討中。

(2) イベント開催など展覧会以外の要因で利用者を増やす取り組みの推進

・コンサート等、各種イベントの開催

⇒マジックワークショップ、クリスマスコンサート、「蓄音機で名曲を」、累計

観覧者100万人達成セレモニー、100万人達成イベントを開催

・年間パスポート、前売り券の販売

	販売場所	販売枚数	利用回数
パスポート	美術館	537枚	2,523回
	芸術劇場	17枚	
	計	554枚	
前売り券	美術館	101枚	232回
	芸術劇場	160枚	
	計	261枚	

・ユニークベニュー*など新たな活用方法の調査、研究

⇒実績のある複数の館へ電話ヒアリングなどを行ったが、本格的な検討段階になく、大がかりな調査、研究は休止し、随時情報収集することとしたい。

※ ユニークベニュー・・・歴史的建造物や公的空間等で、会議・レセプション等のイベントを開催することで特別感や地域特性を演出できる会場

(3) 外部連携の推進

①他部局との連携

・カレーフェスティバルなどイベント参加による情報発信

⇒カレーフェスティバル(5/9-10)や産業まつり(11/7-8)などへの協賛

・米海軍横須賀基地在住者の誘致

⇒What's New in Yokosuka(外国人向け広報紙)への展覧会情報の掲載

・横須賀製鉄所(造船所)創設150周年記念事業の一環としての博物館、文化振興課等との共同イベントの開催

⇒記念事業の一環として企画展(浮世絵展)、特別展示(モンゴルフィエ関連資料)、スタンプラリーの開催

②民間事業者との連携

・民間事業者との広報協力、イベント参加による情報発信

⇒広報協力(観音崎京急ホテル、ソレイユの丘、うらり、すかなごっそほか)

- ⇒横浜国立大学学園祭（清涼祭 5/23-24、常盤祭 10/31-11/2）、
日本大学学園祭（法桜祭 11/1-3）、
大人のための文化祭（10/11 に浦賀で開催のアートイベント）への協賛
- ⇒日産スタジアムの横浜F・マリノス戦へのブース出店（8/29）
- ・福利厚生団体等との割引施設契約の実施
⇒J A F、J T B ベネフィット、リロクラブ、神奈川県厚生福利振興会
神奈川県市町村職員共済組合 など

③近隣地域との連携

- ・町内清掃、防犯パトロールなど地域活動への参加
⇒町内清掃などの地域活動への参加や町内会での美術館 P R
- ・観覧ツアーなど美術館活動による交流の実施
⇒検討したが、予定団体との日程等が合わず、昨年度の実施は見合わせた。
- ・観音崎全体の魅力を向上させるためのイベントの開催
⇒ガリバーコンサート（7/12）開催（ガリバープロジェクト）
⇒観音崎フェスタへのブース出店（11/3）
- ・地域での消費活動を促進する取り組みの検討
⇒繁忙期ケータリングへの近隣事業者の新規出店（8/23・29、11/3）

（4）団体集客の推進

- ・市内民間事業者と連携した企画（ツアープランなど）の検討、提案
⇒㈱トライアングルと連携し観覧者 100 万人達成記念イベントを開催（4/2）
- ・旅行会社への団体ツアーの企画提案、誘致
⇒旅行事業者営業訪問
（クラブツーリズム、小田急トラベル、朝日旅行、京急観光）
経済部主催の観光商談会（7/15）への参加
⇒昨年度、募集型企画旅行による観覧者が大幅に減少した。自衛隊の護衛艦に乗船するツアーの中で美術館を組み入れていただきましたが、護衛艦の受け入れがなくなったことが大きな要因です。今後、新たな団体集客のための方策を検討していきます。
- ・ウェルカムトークの実施
⇒募集型企画旅行は少ないが、希望に応じて実施
会津若松市ジュニア大使（8/5）
ミス・インターナショナル（10/25）

（5）商業撮影の受入と誘致

- ・イメージアップと認知度の向上を目的に商業撮影を受け入れた。
⇒昨年度は 30 件を目標としたが、最終的に 33 件となり目標を達成した。
※平成 25 年度、26 年度は新車の撮影会があり、撮影料が多かったため。
（スチール24件、動画 9 件）

年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
撮影件数	22 件	23 件	45 件	33 件
使用料	677,500 円	1,970,500 円	2,661,751 円	1,517,681 円

② 市民に親しまれ、市民の交流、活動の拠点となる

〔一次評価〕

達成目標	実施目標
A	A

【達成目標】 市民ボランティア協働事業への参加者数延べ 2,000 人
(事業ごとに加算。登録者・一般参加者を総合して)

〔目標設定の理由〕

- 参加者数は「活動が活発に行われているか」「魅力的な活動を企画しているか」をはかるための指標の1つとなるものです。
- 新規に活動に加わる人がいるいっぽうで、継続的に活動していた人が引退するケースも散見され、担い手の数は全体として横ばいとなっています。
- ギャラリートークボランティアは、27年度は新規募集を行わないため、研修の回数は26年度より少なくなります。
- 小学校鑑賞会ボランティアは、年度毎の募集となるので（継続も可能です）、参加者の増加を期待したいところです。
- みんなのアトリエボランティアの登録者数自体は増えていますが、アトリエ参加者の定員数に対し、ボランティアは2～3名と決まっているので、活動自体は横ばいとなっています。
- プロジェクトボランティアの活動では、平日の活動がやや増えています。また近年、イベントへの一般参加者数は、スタッフの人数と会場のキャパシティからみて、安全に楽しむことのできる限界に近付いていると考えられます。
- 年間の活動日数、ボランティアの参加状況、イベント参加者数の動向をふまえ、27年度の目標は、延べ2,000人とします。

〔一次評価の理由〕

- 27年度の延べ参加者数は2,207人となり、目標を上回りましたので、A評価としました。ただし、課題もあります。
- プロジェクトボランティアの活動においては、例年よりも健闘しました。スタッフの人数や会場のキャパシティに課題があるという自覚から、実施回数を増やす等の改善を図った結果と考えています。

- ・ギャラリートークボランティア、小学生美術鑑賞会ボランティア、みんなのアトリエボランティアの参加者数については、例年よりも下回る結果となりました。特に、ギャラリートークへの参加者の減少は顕著です。
- ・ギャラリートークボランティア、小学生美術鑑賞会ボランティアがやや高齢化しています。
- ・ボランティアに登録はしているものの、なかなか活動に参加できない人もいます。

市民ボランティア協働事業への延べ参加者数 (単位：人)

	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
ギャラリートークボランティア	392	477	323	292
小学校鑑賞会ボランティア			194	187
みんなのアトリエボランティア			28	22
ギャラリートーク参加者	309	326	345	301
プロジェクトボランティア	258	337	229	225
プロジェクト当日ボランティア			50	38
企画イベント参加者	1,116	1,434	1,086	1,142
計	2,075	2,574	2,255	2,207

【実施目標】

- ・市民が美術館に親しみを感じ、訪れる機会をつくる。
- ・市民ボランティアが、やりがいを持っていきいきと活動できる場を提供する。

〔目標設定の理由〕

- ・市民感覚を持ったボランティアと協働することにより、市民にとって親しみやすい美術館により近づくことができます。また、美術館への親しみ、愛着を持ったボランティアの方々を架け橋として、より広い層の市民に美術館の魅力を知っていただく機会を増やしたいと考えています。
- ・横須賀美術館のボランティア活動は労働ではなく、美術館が担うべき社会教育の一環です。ボランティアがそれぞれの創意と経験を活かし、仲間どうし協力し、美術館ならではの活動をしていくこと、そして、やがてそれが地域の新しいコミュニティとなることを期待しています。
- ・ボランティア活動がより広がるよう努めていきます。例えば、ギャラリートークボランティアの活動の周知や、小学生美術鑑賞会ボランティアやみんなのアトリエボランティアのように、美術館主体の事業に関わっている活動の充実などを検討していきます。

[一次評価の理由]

(全体として)

- ・ボランティアの多様な活動の実態と、ボランティアからの近年の要望に応じて、活動内容、募集の方法を見直し、サポートボランティア活動の目的を明確にし、細分化した結果、ボランティア自身のモチベーションが確保されるようになりました。また、組織を整理し、組み替えたことにより、以前に比べ、ボランティアに対し細かい対応ができています。

(ギャラリートークボランティア)

- ・24年度に募集した第3期生が他のボランティアと並んで本格的に活動していますが、26年度に募集した第4期生の活動が思うように進んでいません。仕事と並行してボランティア活動を行うことの困難さが原因のようです。
- ・研修の一環として、版画家の藤田修氏の工房を訪問するツアーを実施しました。作品制作について、藤田氏から直接話を聞くことができ、大変好評でした。
- ・ギャラリートークでは、当日の担当者間で取り扱う作品を分担し、それぞれ工夫した個性的なトークを展開しています。

(小学生美術鑑賞会ボランティア)

- ・ボランティアを新規募集し、6月に集中して学校受け入れのための研修を行いました。
- ・企画展毎に、担当学芸員によるレクチャーを行い、企画展でもボランティアが安心して小学生を受け入れられるようにしました。
- ・ボランティア2名に1クラスの引率をお任せしており、責任感とやりがいをもって取り組んでいただいています。

(「みんなのアトリエ」ボランティア)

- ・27年度も新規登録者が増えました。しかし、1回の「みんなのアトリエ」に必要なボランティアは2～3名なので、ご協力のお申し出をお断りすることもありました。

(プロジェクトボランティアについて)

- ・「だれでも参加できる」「美術館を活かした活動」という点に留意しながら、年3回（ゴールデンウィーク、夏休み、クリスマスに近い時期）、ボランティア自身が発案し運営するイベントを行いました。それぞれのイベントは地域の行事としてすでに定着し、市民を中心に多くの方が参加しています。
- ・イベントの参加者、特に子どもたちと交流を持つことが、企画するボランティアのやりがい、喜びの大きな要因となっています。
- ・活動に興味を持ち、企画段階から主体的に参加するボランティアが増えています。
- ・若い世代や主婦層の参加者が増え、異世代交流の機会となっています。

- ・ イベントの準備や当日の進行がスムーズに行われているのは、これまでのイベントで積み重ねてきたボランティアの経験が活かされているからです。
- ・ 季節を問わず、海の広場を用いたイベントについては、市内の子どもを持つ家庭に定評があり、すでに恒例行事として定着していると考えられます。

[次年度への課題]

- ・ ボランティアの活動の目的を明確にし、細分化したため、それぞれの活動に応じて、さらにきめ細やかな研修を行っていきたいと考えています。
- ・ ギャラリートークボランティアおよび、小学生美術鑑賞会ボランティアについては、平成28年度に新規募集しており、さらなる増加を期待したいところです。同時に、児童の鑑賞活動をよりサポートできる体制を整えられるよう、検討を進めます。
- ・ ギャラリートークボランティアの活動周知について、ボランティアと相談しながら、仕組みや方策を検討していきます。

Ⅱ 美術に対する理解と親しみを深める

③ 調査研究の成果を活かし、利用者の知的欲求を満たす

〔一次評価〕

達成目標	実施目標
A	A

【達成目標】 企画展の満足度 80%以上

〔目標設定の理由〕

- ・展覧会を企画・実施することは、美術館にとって基本的な活動のひとつであり、中でも、企画展は、波及効果が高く、最も力を注ぐべき事業といえます。こうした認識から、企画展に対する来館者の満足度を、美術館の社会教育機能の高さを示す目安としました。
- ・満足度は来館者へのアンケートによって算出しており、同じ方法の調査を継続的に行っています。またその満足度の内訳は「作品」「観覧料」「配置・見やすさ」「解説・順路」「心的充足」を計っていて、その総合数値を出しています。
- ・満足度の内訳を見ていくと、「観覧料」「解説・順路」の内の順路については、満足度を上げていくことには限界があり、「作品」「配置・見やすさ」そして解説について改善の余地があります。
- ・ここ数年の数値の変化の経緯を総合的に判断し、目標を80%以上としました。

※ なお、年度ごとの「企画展満足度」を算出する際には、それぞれの企画展の観覧者数の比率を反映させています。企画展Aの観覧者数をA（人）、企画展Aの満足度をa（%）とすると、年度ごとの満足度（%）は
$$(A a + B b + C c + D d + E e + F f) / (A + B + C + D + E + F)$$
で表します。

〔一次評価の理由〕

目標の「80%以上」を超える 87.0%という数値となりました。

	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
企画展満足度	80.9%	77.6%	84.6%	87.0%

企画展別にみると、「ほっこり美術館」は、親しみやすいタイトルとテーマでした。「解説・順路」の74.8%が最も低く、作品の満足度は90.1%でした。他の項目も80%台と概ね高かったといえます。

「ウルトラマン創世紀」は、当館で初めてサブカルチャーを扱った展覧会。夏休みに開催しましたが、1966～1980年の子ども文化を扱っており、その当時子どもだった40歳代～50歳代の男性が特に多く来館し、総じて高い数値となりました。

「長新太の脳内地図」展は、人気作家の長新太の絵本原画を中心に構成した展覧会であり、また「第2次横須賀市子ども読書推進計画（第2次愛読プラン）」に位置付けられた事業です。作品に対する満足度は94.6%と高く、大人から子どもまで満足した結果が表れました。

「浮世絵にみるモダン横須賀&神奈川」展は横須賀製鉄所（造船所）150周年を記念した事業です。満足度は非常に高く91.8%となりました。また来館者の年齢構成として、70歳以上、次いで60歳代、さらには市民率も高く、身近な地域や知っている地名が多かったため、期待に応えられたと考えられます。

「嶋田しづ・磯見輝夫展」は、逗子、鎌倉出身と地域ゆかりの現代作家の二人展です。作品や配置・見やすさについては80%を超えましたが、解説・順路は69.1%でした。章解説は用意しましたが、作品解説をつけなかったことが理由と考えられます。総合的には81.8%となりました。

毎年恒例となっている「児童生徒造形作品展」の観覧者の多くは出品された子どもたちの関係者であり、内容を批判する要素に乏しいことから、他の企画展と満足度を比較するには注意が必要ですが、88.7%と高い数値を得られました。

また、要素別に満足度を検討すると、「解説・順路」については、改善の余地がある高くない数値となっています。アンケートでも、「キャプションの漢字が読めない」「解説が難しい」などの意見が寄せられているので、より分かりやすい表示をしていくなど、今後の課題とします。

【実施目標】

- ・幅広い興味に対応するようバランスをとりながら、年間6回（児童生徒造形作品展を含む）の企画展を開催する。
- ・所蔵品展・谷内六郎展をそれぞれ年間4回、テーマをもたせた特集を組みながら開催する。
- ・知的好奇心を満たし、美術への理解を深める教育普及事業を企画・実施する。
- ・所蔵図書資料を充実させる。
- ・利用する人が快適に過ごせるよう、図書室の環境を整える。
- ・主として所蔵作品・資料に関する調査研究を行い、その成果を美術館活動に還元する。

〔目標設定の理由〕

社会教育機関としての美術館は、常に知的好奇心を満足させる事業を行い、また、そのための環境を整えていかななくてはなりません。美術として扱うべき領域はとても広く、利用者の幅広い興味に応えるためには、所蔵品展以外にもさまざまなテーマを設けた企画展を開催する必要があります。作品の借用が許される期間に限度があることなどを考慮し、1カ月半から2カ月程度を目安とした年間6回の企画展を計画・開催しています。また、コレクションの魅力を紹介するために、所蔵品展および谷内六郎展をそれぞれ年間4回開催しています。

さらに、横須賀美術館では、美術への親しみ、理解を深めるために、講演会やワークショップなど、年間を通じてさまざまな教育普及事業を展開しています。ここでは、広く一般向けの教育普及事業について、評価の対象とします。

これらの事業を企画・実施するための基礎が、調査研究です。範囲は、所蔵作品に関することを中心に、広く美術に関すること、教育普及に関することを含みます。

〔一次評価の理由〕

27年度の企画展は、親しみやすいテーマ展、サブカルチャーを扱った「ウルトラマン創世紀」展、人気作家の絵本原画展、浮世絵、現代作家の個展など多岐に渡っていました。

「ほっこり美術館」展は、当館の単独自主企画として開催し、近年人々の口にのぼる機会が増えた「ほっこり」をキーワードに、埴輪、大津絵、浮世絵から日本画、洋画、現代美術まで幅広く約120点を展示しました。本展は、横須賀市自然・人文博物館、神奈川県立歴史博物館などが所蔵する蓼原古墳出土埴輪を揃って展示する初めての機会となりました。

「ウルトラマン創世紀」展は、巡回を受け入れるかたちでの開催でした。会場構成では、単なる懐古趣味に陥らないよう、ウルトラマンシリーズの制作に携わった人々のオリジナルティや、技術の紹介に重点を置くよう工夫しました。

「長新太の脳内地図」展では、絵本や子どもの本の原画のほか、大人向けに発表された漫画やイラストレーション、エッセイなど約300点にのぼる作品を展示しました。絵本を手にとって読むことができる絵本コーナーも設置し、こちらもたいへん好評でした。

「浮世絵にみるモダン横須賀&神奈川」展は、横須賀製鉄所（造船所）創設150周年記念事業の一環として開催されました。神奈川エリアを描いた浮世絵のコレクションで知られる川崎・砂子の里資料館の協力を得、江戸時代の名所絵や明治時代の錦絵など約250点を展示しました。地域の歴史を長いスパンで振り返るという展覧会趣旨に対しては、これまで美術館に足を運ぶ機会の少なかった地域の高齢者層からも好評を得ることができました。

「嶋田しづ・磯見輝夫展」は、個性豊かな二人の県内在住作家の最新作を含む約90点を展示し、「色彩とモノクローム」をサブタイトルとし、油彩と版画の対照的な作品世界を楽しんでいただきました。

所蔵品展では、会期ごとに特集を組み借用作品も加えて、より魅力のある展示となるよう努めました。結果的に小企画展を行ったこととなり、総合で満足度が72.6%となりました。

第1期では、横須賀出身の版画家で多数寄贈を受けた「木村利三郎」を特集しました。また同じく新収蔵となった藤田修の版画集を紹介しました。

第2期では、画家・上條陽子の油彩画と、新作インスタレーションを組み合わせ、北側展示ギャラリーに展示しました。

第3期では、横須賀製鉄所（造船所）150周年記念事業の一環として、フランス人エミール・ド・モンゴルフィエが残した写真、書簡等を特別展示しました。

第4期では、横須賀市出身の日本画家、山中總について、所蔵品を含めた11点で構成し紹介しました。また、山中にちなみ、所蔵作品の中から戦後の日本画を展示しました。

谷内六郎館では、所蔵品展の会期と連動して、年4回の展示替えを行っています。25年度は、第1期では「かぞくの時間」、2期では「子どもの一日」というテーマをたて、3、4期ではテーマ展示を行った他、NHK日曜美術館40年記念「みつけよう、美」キャンペーン連動企画として、映像に登場する作品と資料を展示しました。

教育普及事業（一般向け）については、一覧すると下表のようになります。

いずれも、参加者と講師、主催者が互いに質の高いコミュニケーションを取り合えるよう、そのつど適正な規模を考えて実施しています。また、講師と美術館スタッフが打合せを重ね、入念な準備を行なっています。結果として、規模は大きくないものの、参加者の満足度の高い事業となっています。

講演会・アーティストトーク

(単位：人)

タイトル	実施日	講師	定員	応募	参加
アーティストトーク	4月25日	深堀隆介(「ほっこり美術館」展 出品作家)	70	—	85
アーティストトーク	5月17日	鴻池朋子(「ほっこり美術館」展 出品作家)	70	—	33
講演会『『特撮』ってなんだろう?』	7月4日	池谷仙克(美術監督)	70	—	75
講演会「長新太の絵本の方法－編集者がみた2冊のラフ」	9月20日	土井章史(トムズボックス代表、 フリー編集者)	50	—	75
講演会「私と浮世絵」	11月14日	斎藤文夫(川崎 砂子の里資料 館館長)	50	—	49
「磯見輝夫×建畠哲」	2月14日	磯見輝夫(出品作家)、建畠哲 (多摩美学長、埼玉県立近代美 館館長)	70	—	65
講演会「生活家電の夜明け－『白』 が輝き始めた時代」	5月30日	市橋芳則(北名古屋歴史民俗 資料館[昭和日常博物館]館 長)	70		20
作家によるギャラリートーク	7月18日	上條陽子(第2期所蔵品展 tabra rasa 出品作家)			26
「嶋田しづ・磯見輝夫展」ギャラリー ツアー アート&ディナー	3月12日	当館学芸員	20	18	16
学芸員によるギャラリートーク(各企 画展)	5月9日 7月11日 9月26日 11月23日 3月5日 3月26日	当館学芸員			104 *合計 値

展覧会関連ワークショップ

(単位：人)

タイトル	実施日	講師	定員	応募	参加
谷内六郎館関連「SHOWA スパイ大作戦」	5月31日	松村淳子(アートエデュケーター)、伊藤明良(北名古屋市歴史民俗資料館[昭和日常博物館]学芸員)	10組	10組	8組 (25)
浮世絵展関連「摺師の技を知る-摺りの実演とお話、ミニ・ワークショップ」	11月29日 (2回)	公益財団法人 アダチ伝統木版画技術保存財団	60 (各回30)	50	50

オトナ・ワークショップ

(単位：人)

タイトル	実施日	講師	定員	応募	参加
「ステンドグラスのオーナメントづくり」	7月12日 (2回)	nido(ガラス作家)	10	50	10
			10	36	10
「ステンドグラスのクリスマスオーナメント」	12月2日 (2回)		10	80	10
			10	48	10

映画上映会

(単位：人)

タイトル	実施日	講師	定員	応募	参加
冬のシネマパーティー 『ブランカニエバス』	1月30日	キノ・イグルー (シネクラブ)	25	21	19
	1月31日		25	28	25

教育委員会他課との連携

(単位：人)

タイトル	実施日	講師	定員	応募	参加
歴史講座(横須賀市自然・人文博物館主催事業および「ほっこり美術館」展関連事業。横須賀美術館)*	5月20日	稲村繁(横須賀市自然・人文博物館学芸員)	—	—	37
第39回横須賀市市民大学講座「フランス文化受容の地・横須賀：浮世絵を介して開花したジャポニスム」(横須賀市生涯学習財団との共催。ウエルシティ市民プラザ)	10月26日	当館学芸員、小林照夫(関東学院大学名誉教授)	120	87	82
第37回美術館めぐり「横須賀美術館『浮世絵にみる モダン横須賀&神奈川一斎藤コレクションから』」(横須賀市生涯学習財団との共催。横須賀美術館)	11月19日	当館学芸員	40	38	35

企画展・所蔵品展・谷内六郎展を合わせて、計8回の講演会および展覧会出品者によるトークを行いました。展覧会関連のワークショップは3回(同内容で2回実施の分を含む)実施しました。

平成27年度の講演会は、出品作家や関係者を講師にむかえ、リアルな制作エピソードをお話いただくなど、展覧会と深く関わる内容で実施することができました。参加者も多く得られ、また事業効果の面でも、展覧会への理解を深めるという目的に適うものであったと考えます。

展覧会関連のワークショップでは、デモンストレーションとの組み合わせ（浮世絵展）、作品鑑賞との組み合わせ（谷内六郎館）といった、当館としては初めての手法も取り入れてみました。結果として、これまでとは異なる参加者層の開拓に結びつく効果がありました。

当館の特徴的な事業の一つである「オトナ・ワークショップ」では、以前開催して好評だったステンドグラスを再度テーマとして取り上げました。また、通例では年間に2テーマで各2回行なうところ、平成27年度は同内容で季節をずらし、計4回行いました。当館のワークショップは倍率が高く、なかなか参加できないという声がありますが、これをある程度解消する効果があったと考えます。

映画上映会は、「シネマパーティー」として恒例化しているイベントで、例年通り、安定した参加者数を得ています。今回は、参加費を1,700円（通常のワークショップは1,000円）とし、トサカンムリフーズによる軽食を提供し、好評でした。

また、市民大学講座や博物館との連携による教育普及事業を3件実施し、合わせて150名を超える参加を得ることができました。

図書室に関しては、定期購読雑誌や作品集をはじめ、美術史・デザイン・建築・写真など幅広い分野の美術図書と、自館で開催する展覧会に関連する資料、子ども向けの美術入門書やアーティストによる絵本などを収集しています。配架の工夫や室内案内表示により、利用しやすい環境づくりに努めているほか、展覧会関連資料については、図書室だけでなく展示室内にも案内用のファイルを置き、利用の拡大につとめています。

④ 学校と連携し、子どもたちへの美術館教育を推進する

〔一次評価〕

達成目標	実施目標
A	A

【達成目標】中学生以下の年間観覧者数 22,000 人

〔目標設定の理由〕

子どもたちが美術館に親しみをもち、利用しやすくするためのさまざまな取り組みをしていますが、その成否は、実際の観覧者数に反映されるはずですが、

従来、横須賀美術館では、一定の質を保った美術展を年間通してバランスよく行うこととしています。特に夏季には、家族で楽しめる美術館であることをアピールするよう心がけ、平成26年度については「子どもと美術を楽しみたい！キラキラ、ざわざわ、ハラハラ展」を開催しました。その結果、特に幼児の観覧者数が前年より大きく増加しました。今年度も、この方向性を維持していくことを前提に、美術館でなければならない子ども向けの事業を行います。

しかし、市全体の14歳以下の人口が減少していることや、子ども向け事業の対象からははずれる中学生の観覧者数が横ばいもしくは減少傾向であること、また、平成27年度より、収支改善の取り組みとして子ども向けワークショップの参加を有料化する予定であることなど、中学生以下の観覧者数が容易には増加しにくい条件がいくつか見られることを考慮し、平成27年度の目標は、これまで通り22,000人としました。

〔一次評価の理由〕

27年度の中学生以下の年間観覧者数は24,173人となり、目標を達成しました。

中学生以下の観覧者数 (単位：人)

	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
幼児	4,314	5,358	9,216	7,202
小学生	11,301	11,819	12,851	12,639
中学生	3,881	4,119	4,003	4,332
計	19,496	21,296	26,070	24,173

若年層に配慮した事業と、そのPR計画の成功が、目標達成につながっています。

夏休み期間に開催した「ウルトラマン創世紀展」の中学生以下の観覧者数は9,331人、秋に開催した「長新太の脳内地図」展は5,388人でした。年間の中学生以下の観覧者数のうち6割が、この二つの展覧会の観覧者で占められたこととなります。

この二つの展覧会では、いずれも、市内の小中学校を通じ全児童生徒にチラシを配布しました。展覧会情報を、学校からの配布物という信頼性の高い手法で周知することには、一定の効果があると考えられます。

このほか、美術館では、児童生徒造形作品展の開催や、子ども向けワークショップ等によって、小・中学生の造形活動を支援しています。平成27年度は、児童生徒造形作品展において約2600点の作品を展示しました。同展の中学生以下の観覧者は5,485人でした。また、映画上映会を含む8つの子ども向けワークショップを実施し、合計で790人（保護者を含む）の参加を得ました。

鑑賞の面では、小学生美術鑑賞会（全市立小学校6年生約3500人が参加）、中学生対象の鑑賞教室（保護者を含む197人が参加）、未就学児から小学校低学年を対象とした親子向け展覧会ツアー（3回実施、13組29人が参加）、保育運営課との連携による市立保育園10園を対象とした鑑賞プログラムなど、年齢別にさまざまな鑑賞活動支援事業を行なっています。いずれも、継続的に実施しているものですが、教員や保育士との連携、他館との情報共有により、つねに発展的な内容となるよう努めています。

【実施目標】

- ・学校における造形教育の発表の場として、児童生徒造形作品展を実施する。
 - ・学校と緊密に連携し、子どもたちにとって親しみやすい鑑賞の場をつくる。
 - ・子どもたちとのコミュニケーションを通じて、美術の意味や価値、美術館の役割などに気づき、考え、楽しみながら学ぶ機会を提供する。
 - ・鑑賞と表現の両方を結びつけたプログラムを実施する。
 - ・小学校鑑賞会を充実させるため学校との連携を強化する。鑑賞会と連動した教材「アートカード」の一層の活用促進を教員と協力しながら行う。
-

〔目標設定の理由〕

美術教育は表現と鑑賞との両輪によってなりたつものですが、多くの学校教育現場では鑑賞の機会に乏しく、表現としての造形教育に偏りがちでした。

近年の学習指導要領では、小・中学校における鑑賞教育がより重視されるようになってきています。平成23年度から実施された小学校の新学習指導要領では、鑑賞教育のために地域の美術館を利用することに加え、学校と美術館との連携を図ることが明示されています。

学校教育ではできない、美術館だからこそできることは何かをじゅうぶん意識しながら、鑑賞教室やワークショップ、作家との連携等充実したプログラムを企画、提供することによって、子どもたちが美術に親しみをもつ機会の拡充につとめていきたいと考えています。

〔一次評価の理由〕

- ・平成20年度から、市内の子どもたちの作品を一堂に展示する「児童生徒造形作品展」の会場となっています。学校・幼稚園と緊密に連携しながら、運営にあたっています。
- ・平成19年度から実施している小学生美術鑑賞会の対応には、学芸員と専門のボランティアがあたり、ワークシートなどを利用して、鑑賞の楽しさを知ってもらえるようつとめています。受け入れ側が経験を積むことによって、内容も充実度を増しています。
- ・平成27年度の小学生美術鑑賞会では、アートカードによる事前授業の実施状況等を各校に調査しました。事前授業によって、あらかじめ作品のイメージが伝わっていると、作品に対する児童の反応もよくなることが分かりました。

- ・市外や私立の小・中学校に対しても、要望に応じて、美術館でのマナー解説やワークショップの提供を行いました。
- ・夏休みの時期に合わせ、中学生のための美術鑑賞教室を実施しました。鑑賞ガイドの内容が、参加する中学生のニーズに合うようつとめました。
- ・子どもを対象とした教育普及事業に積極的に取り組んでいます。ワークショップなどの造形活動のほか、野外映画会や、親子向けのツアーなど、さまざまなかたちで美術を楽しむ機会を設けています。
- ・鑑賞支援活動については、対象となる年齢層の幅を広げています。親子向けツアーのほか、平成24年度から市の保育運営課と連携し、市立保育園全10園に対し、出前授業と来館時の鑑賞プログラムを実施しています
- ・美術館が主体となっていく事業だけでなく、先生が中心となり学校で行なうことのできる鑑賞教育について、研究と実践を重ねています。そのための教材として、平成25年度に、「横須賀美術館アートカード」を制作し、平成26年度は、教員向けのアートカード活用研修と、鑑賞教育に関するフォーラムを開催しました。平成27年度は、Web サイト版アートカードの活用をテーマとした教員向け研修会を開催したほか、Web サイトの改良を行いました（いずれも、文化庁補助事業）。また、学校の授業と来館プログラムとを組み合わせた中学生向けの指導案や、制作と連動したアートカードの活用にも、教員とともに積極的に取り組みました。
- ・キャリア教育の面で、市立中学校の職業体験に協力しています。

〔次年度への課題〕

- ・平成25年度より継続して行なってきた「地域とはぐくむ子どもための鑑賞教育基盤整備事業」は、当初予定通り、27年度末をもって、文化庁からの助成が終了しました。助成により制作したアートカードは、現在、小学生美術鑑賞会の事前授業において、9割近くの学校に活用されています。今後も、学校現場での活用状況を把握し、必要に応じてさらなる活用促進を呼びかけていきます。また、学校で行なわれる鑑賞教育と連動した、的確な来館プログラムについて、研究を進めます。
- ・中学生のための美術鑑賞教室の参加者の大半は、美術館レポートなどの宿題のためにこの事業に参加しています。宿題に役立つ情報を提供することが重要であると同時に、単なる宿題の「消化」に終わらせない、プログラムの工夫が必要です。
- ・例年、約10校の小学生美術鑑賞会の日程が、「児童生徒造形作品展」の会期に当たっています。同じ小学校が毎年、この会期を希望してくる傾向があります。
- ・これまで、企画展ごとに開催していた親子向けツアーですが、近年、展覧会の内容や開催時期による申し込み数のばらつきが拡大しています。すべての企画展で一律に実施するよりも、長期休暇シーズンや、家族連れをターゲットとした展覧会に特化して実施するほうが、事業効果は高まると予想されます。

⑤ 所蔵作品を充実させ、適切に管理する

〔一次評価〕

達成目標	実施目標
A	C

【達成目標】 環境調査の実施（年2回）
美術品評価委員会の開催（年1回）

〔目標設定の理由〕

美術館としての基本的な活動として、作品収集を行っていますが、購入費（基金）が充当されていないため、寄贈に頼っているのが実状です。したがって、数値目標として新規収蔵作品の数量等を設定することは不適切であると考えます。そうしたなかで、収集のための情報収集や調査を継続的に行うことの結果として、受け入れの可否を諮問するための美術品評価委員会を、年に1回開催することを数値目標とします。

また、収蔵庫の環境が作品の保管に適しているかどうか調べる環境調査を、年2回実施することを、あわせて目標とします。

〔一次評価の理由〕

収蔵施設の環境調査を、5月11日～6月12日、8月18日～9月18日の日程で2回実施し、概ね良好な結果を得ました。また、寄贈の申出のあった作品についての調査を行い、諮問のため美術品評価委員会を3月25日に開催しました。

【実施目標】

- ・ 収集方針に基づき、主体性を持って積極的な収集活動を行う。
 - ・ 適正な保管環境を維持し、そのチェックのため必要な調査を実施する。
 - ・ 計画的に所蔵作品の修復、額装を行う。
 - ・ 所蔵作品が広く価値を認められ、他の美術館等で開催する企画展などに活用されている。
-

〔目標設定の理由〕

すぐれた美術作品をひろく収集し、次世代に伝えてゆくことは、美術館の果たすべき基本的な役割です。そのために、保管のための適切な環境整備と、作品そのものの修復および保護を行っています。他の機関での展示等の所蔵品の活用は、作品への影響を十分に考慮したうえで、可能な範囲で行っています。

〔一次評価の理由〕

平成27年度は寄贈64点を受入れました。

平成20年度以降、毎年50点を超える作品を受け入れています。平成25年度は37点と例年を下回りましたが、昨年度、今年度は60点を超える寄贈を受けました。これまでと同様のペースで短期間に多くの作品を寄贈によって受け入れることには、長期的にみたときに、コレクションのバランスを崩してしまうおそれもあります。今後も作品を厳選し、より慎重な作品収集を行うべきと考えます。

収蔵庫・保管庫について、昆虫類、菌類、気相についての調査（環境調査）を年度内に2回実施し、概ね良好であることを確認しています。開館以来継続的に行っていることには、環境の長期的な変化を観察する意味があります。

修復、額装は、作業に時間がかかることから所蔵品展での展示や他館貸出予定がある作品を優先し、修復4点、額装（額改修を含む）17点、新規マット装11点を行ないました。平成28年度以降も引き続き、近年の寄贈作品を中心に必要な修復、額装を行ない、既存の作品でも画面への映り込みがはなはだしいものについては、アクリルやガラスを外して額縁改修を行うなど見直しを行ってまいります。

所蔵作品の活用について、所蔵作品のうち8件36点を他機関に貸出しました。件数から見ると、21年度16件、22年度12件、23年度18件、24年度14件、25年度実14件から漸減し、昨年度8件と同水準です。この数字は、美術館で全国集荷を行うような大規模企画展開催が減少していることに加え、当館への貸出依頼がある特定の作品に集中する傾向があり、そのため所蔵品展での展示計画や作品保護との兼ね合いで貸出を制限する場合があります。

以上により、例年並みの活動をしているといえますが、作品購入費の充当が途絶えている状況が解消されていないことから、一次評価を「C」としました。

〔次年度への課題〕

- ・ 作品購入の必要性を説明していくと共に、財源について引き続き検討を進め、たとえ少額でも作品購入費が予算配当されるよう努力します。
- ・ 収集作品を精選します。
- ・ 貸出作品の偏りを減らすため、所蔵作品の活用と周知に努めます。
- ・ 収蔵作品の増加に伴い、収蔵庫のスペースを有効活用し、作品を適切に保管します。

Ⅲ 訪れるすべての人にやすらぎの場を提供する

⑥ 利用者にとって心地よい空間、サービスを提供する

〔一次評価〕

達成目標	実施目標
A	A

【達成目標】

- ・館内アメニティ満足度 90%以上
- ・スタッフ対応の満足度 80%以上

〔目標設定の理由〕

- ・これまで目標値が一定ではなく変動していましたが、一つの適正基準を設け、それに対する達成度による評価をしていただくよう、目標値を固定しました。
- ・達成目標の適正基準として、それぞれ 90%以上、80%以上を設定しました。
この目標値は、過去の実績を参考に、目標を高く持ちつつも達成が決して不可能ではないと思われる数値であり、言い換えれば、目標値の達成イコールかなりの高水準を維持できていると思われる数値としました。
- ・満足度は、来館者アンケートの質問 8 項目（アクセス、館内印象、静かさ、スタッフ、休憩所、トイレ・授乳室、清潔感、総合）の内、外部要因や展覧会等の企画内容による影響を受けにくい 2 項目（スタッフ、総合）を指標として使用しています。
- ・館内アメニティ満足度については、来館者アンケートの質問事項「全体的にみて、館内では気持ちよく過ごせた。」に対する満足度（総合満足度）、スタッフ対応の満足度については、来館者アンケートの質問事項「スタッフの対応・案内は適切だった。」に対する満足度を指標としています。
なお、原因を究明し改善に役立てるため、24 年度から 5 段階評価に加え、「特によかったところ、よくなかったところ」を具体的に記述していただく欄を設けています。

〔一次評価の理由〕

館内アメニティ満足度、スタッフ対応の満足度はともに高水準で推移しており、特に館内アメニティ満足度について 90% を超える数値は平成 23 年度以来で、過去最高の数値で目標を達成しました。

スタッフ対応の満足度についても過去最高の数値となり、昨年に続き目標を達成しました。

	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
館内アメニティ満足度	87.6%	88.8%	89.9%	92.5%
スタッフ対応の満足度	79.1%	78.5%	81.9%	85.2%

館内アメニティ満足度に関しては、「美術館入口やトイレの場所がわかりにくい」など、案内サインに係るご意見をお客様から頂戴していますので、改善に向けて今後も工夫を重ねていきます。

【実施目標】

- ・ 建築のイメージを損なわないよう、じゅうぶんなメンテナンス、館内清掃を行う。
- ・ 受託事業者と協力して、ホスピタリティのある来館者サービスを実践する。
- ・ 受託事業者と協力して、付帯施設（レストランおよびミュージアムショップ）を来館者ニーズに応じて運営する。

【目標設定の理由】

- ・ 横須賀美術館が来館者に好ましい印象を持たれている大きな要因の一つは、周囲の豊かな自然と、その風景と調和したユニークな建物です。しかし、海のそばに立地しているため、強い風雨にさらされることも多く、また塩害などによる老朽化が進んでいることも事実です。建築の魅力をいつまでも来館者に伝えていくためには、適切なメンテナンス、清掃を継続していくことが重要です。
- ・ また、スタッフの対応によって、美術館に対する印象は大きく左右されますので、受付・展示監視スタッフ等の受託事業者との緊密な連携を図り、来館者の立場に立ったより良い接客を目指します。
- ・ 美術館を訪れた際の買い物や食事も、来館者の大きな楽しみです。レストランおよびミュージアムショップと連携し、来館者のニーズに即応したサービスの提供がなされるよう、知恵を出し合い、工夫を重ねていきます。

【一次評価の理由】

(メンテナンス)

- ・ 来館者の目に多く触れる場所ではありませんが、事務棟、図書室、レストラン中庭の外壁塗装工事を行い、劣化の防止及び美観が改善しました。
- ・ 不慮の災害に備え、非常用自家発電機の部品交換を含んだ保守点検を行いました。
- ・ 塩害による劣化が激しい屋外ベンチの塗装及び修復不能なものの撤去を行いました。

(清掃)

- ・ 日常の清掃について、人員が必ずしも充分ではない（開館前4名・日中1名）ので、利用状況に応じて重点を移す効率的な清掃を心掛けています。

(休憩所)

- ・繁忙期（GW・夏季）の休憩所を確保するため、26年度からワークショップ室前に簡易休憩所（屋外用テーブル・椅子）を設営しています。利用率も高く、ご好評を頂いていますので、今後も継続していきます。

(受付・展示監視)

- ・受付や展示監視に従事するスタッフは、来館者と直に接するためクレームの対象となりやすく、特に展示監視は来館者への注意などを行うため、どうしてもクレームとは切り離せない業務となっています。

以前は年に数件のクレームがありましたが、受託事業者の自助努力（研修、スタッフの入替など）や、館内における情報の共有化の促進によって日々改善の努力を続けており、満足度の数値も一定以上の水準に達しています。

- ・情報の共有や、来館者への対応方法の指示などをきめ細かく行う目的で、来館者からのクレーム内容や対応の記録を日報として毎日提出するよう、平成21年度より展示監視スタッフに義務付けています。

なお、平成26年10月の受託事業者変更を機に、受付スタッフに対しても日報の提出を義務付けました。

- ・現在の受託事業者においては、社内講師による研修や外部講師による接客マナー研修を実施するとともに、事業者独自の覆面調査員による接客チェックも行なわれており、その結果はスタッフ対応の満足度向上となって現れていると考えられます。

(ミュージアムショップ)

- ・横須賀美術館オリジナル商品（エコバッグ、ボールペンなど各種）の作製販売、企画展や季節に合わせた商品展開、新商品の販売試行など、満足度向上のための自助努力を継続しています。

(レストラン)

- ・メニューの見直しなど運営事業者の自助努力により満足度はかなり向上しています。満足される理由としては、「質の高い食事」「おいしい」のほか、「景色がよい」ことも挙げられています。また、低価格帯メニューが豊富になったことで、ランチタイムの客数は目に見えて増加しています。

- ・企画展ごとに、展示のイメージや内容に合わせた「コラボレーションメニュー」を考案して提供しており、好評を博しています。

- ・混雑時の顧客のストレスを軽減するため、土日祝日については事前予約をとらず、先着順に対応しています。

(災害への備え)

- ・例年通り年2回の防災訓練を実施しました。

平成27年度2回目の訓練は、受付展示監視スタッフも参加し、避難経路の確認および誘導に重点を置き、かつ、消防士によるAED操作講習や救護訓練を行うなど、実践に即した内容としましたので、訓練参加者の関心も高く、充実した訓練となりました。

(その他)

- ・社会情勢を鑑み、来館者に影響を与えない範囲での節電を継続しています。
- ・平成21年度より、毎月1回、レストラン、ショップ、受付展示監視、警備、広報、総務、学芸の参加による運営事業者連絡会議を開催し、館内で起こっている諸問題について情報共有、改善の提案、検討を行なっています。
平成26年度からは設備日常監視業務の受託事業者にも参加して頂いています。
- ・混雑が予想される連休等にあわせて、ケータリングカーを誘致し、より多くの来館者に軽食等を提供できるようにしています。(平成20年度以降継続)

⑦ すべての人にとって利用しやすい環境を整える

〔一次評価〕

達成目標	実施目標
B	A

【達成目標】 福祉関連事業への参加者数延べ 400 人以上

〔目標設定の理由〕

- ・福祉関連の事業は、対象を限定すればするほど参加者数が減る傾向にあります。しかし一方で、対象を限定した事業展開こそ必要な分野でもあります。
- ・上記のような事情により、福祉関連事業は、その年の事業の性格次第で参加者数の増減が大きくなりがちです。そこで、過去の事業内容と参加者数、平成27年度の事業内容を考慮し、400人以上を平成27年度の目標値としました。

〔一次評価の理由〕

- ・27年度の福祉関連事業への参加者数は延べ318人となり、目標を下回りました。

福祉関連事業への参加者数 (単位：人)

	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
講演会	29	29	31	28
障害者向けワークショップ	19	26	50	45
パフォーマンス	55	125	151	
みんなのアトリエ	169	214	191	189
託児	23	27	34	25
未就学児ワークショップ	38	98*	39	31
計	333	519	496	318

※ 未就学児ワークショップは実施年度により、子どものみの参加の場合と親子参加の場合があります。25年度は親子の合計人数。

- ・講演会の参加人数は、ほぼ例年並みです。
- ・今年度は、福祉パフォーマンスを福祉ワークショップに転用し、福祉ワークショップを2回、未就学児向けワークショップを1回の計3回行いました。福祉パフォーマンスをワークショップに転用したことが、参加者数の減少につながっていますが、ワークショップにしたことで、事業のねらいを明確にし、従来に比べて福祉的な活動として定義づけられたと考えています。

- ・みんなのアトリエの参加者数は、ほぼ例年並みでした。
- ・「その他」は託児の受託児数です。福祉パフォーマンスの参加者数を含んでいないため、前年度に比べ数が減っています。

【実施目標】

- ・年齢や障害の有無などにかかわらず、美術に親んでもらう（環境づくりの）ための各種事業を行う。
- ・必要に応じて、対話鑑賞等の人的サポートを実践する。

【目標設定の理由】

- ・各種事業を通じて、美術館が健常者のみの施設ではないこと、障害の有無に関わらず美術を楽しめること、また各年齢や状況に応じた楽しみ方があることを伝えていきたいと考えています。
- ・設備や什器を新規に導入するよりも、対話鑑賞のような人的対応を充実させることのほうが、福祉の充実につながると考えています。
- ・障害者のニーズを、職員が実践を通して知ることによって、次年度以降の取り組みや長期計画に活かしていきたいと考えています。

【一次評価の理由】

- ・障害児者向けワークショップ「みんなのアトリエ」では、リピーターに加え、新規での参加希望者が増え続けています。チラシやHPでの広報活動や、参加者の口コミが広がっている表れと感じます。リピーターの方も、新しく参加しはじめた方も、リラックスして各々のペースで制作を行うことができます。
- ・福祉講演会では、フランスのシテ科学産業博物館のアクセス部門に長く勤務されているオエル・コルヴェストさんをお招きし、同館における視覚障害者のアクセスシビリティの歴史について紹介いただきました。スタッフ間の意識を共有しあうことが、障害者の受け入れには必要不可欠であることを再認識した講演でした。
- ・触覚とコミュニケーションをテーマにした福祉ワークショップでは、内容を2部構成としました。はじめに当館学芸員がファシリテーターとなり、谷内六郎の作品を用いて、言葉による作品鑑賞（対話鑑賞）をし、次に、アーティストがファシリテーターとなり、触覚をテーマにしたワークショップを開催しました。盛りだくさんの内容でしたが、視覚に障害のある参加者の方からはたいへん好評でした。
- ・聴覚障害者と聴者が共同で公演活動を行っている人形劇団を招いた福祉ワークショップでは、各々の音づくりと、言葉以外で表現することを探求しました。初めて見る楽器や珍しい楽器に触れたり、それを使った音遊びをした後、いろいろな素材を組み合わせた自分だけのお人形をつくり、そのお人形を動かしながら、オリジナルの人形劇にも挑戦しました。

- ・養護学校への事前（出前）授業については、1校から依頼があり、学芸員2名が授業を行いました。学校や学年によって障害の程度が大きく変わりますが、教員との打合わせと入念な準備を行い、その都度適した内容にアレンジしながら実施することができました。

〔次年度への課題〕

- ・「みんなのアトリエ」については、人気がある内容の実施回数を増やしたり、新たな素材・道具を取り入れる等、活動内容の見直しを行い、参加者の期待を維持していく必要があります。また、毎年3月にワークショップ室で行っている1年分の作品展示については、観覧者から好評をいただいているため、さらに情報の充実を図り、広報活動の場として活用していきます。
- ・福祉ワークショップは、視覚障害者、聴覚障害者の参加があり、また、子どもから高齢者まで、さまざまな世代の人が一緒に楽しむという目的を達成することができたと思います。養護学校や高齢者団体への広報を手厚く行うなど、より広い層に向けた情報発信を心がけます。
- ・養護学校への事前授業については、教員の評価も高く、今後も依頼があると推測されます。その場合、すでに事前授業を受けた生徒も多くいるため、授業内容や活動プログラム等が重複し過ぎないように工夫する必要があります。

⑧ 事業の質を担保しながら、経営的な視点をもって、効率的に運営・管理する

〔一次評価〕

達成目標	実施目標
B	A

【達成目標】電気使用量、水道使用量、事務用紙使用枚数を直近3年間の平均値以下とする。

〔目標設定の理由〕

- ・美術館の総事業費の約14.5%を占める電気料、水道使用料、下水道使用料は、達成目標を定め管理していく必要があります。
- ・職員が努力した効果を目に見えて感じることができる目標として、電気使用量、水道使用量、事務用紙使用枚数を、直近3年間（H24～H26）の平均値以下を当面の目標とします。

〔一次評価の理由〕

	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度 (目標)	平成27年度 (実績)
総電気使用量(kwh)	2,559,600	2,571,895	2,582,595	2,571,000	2,540,390
使用量(昼間)(kwh)	1,696,578	1,754,173	1,800,387	1,750,000	1,718,576
使用量(夜間)(kwh)	863,022	817,722	782,208	820,000	821,814
水道使用量(m ³)	4,227	4,055	4,077	4,100	4,396
事務用紙使用枚数(枚)	216,595	209,241	216,104	213,000	211,250

電気使用量・事務用紙使用枚数は平成27年度の数値目標を達成しました。しかしながら、水道使用量については、数値目標を達成できませんでした。理由としては、以下のものがあげられます。

- (1) 観覧者増による手洗い場の利用増
- (2) レストランの水道使用量の増

【実施目標】職員全てが費用対効果を常に意識し、事業に取り組む。

〔目標設定の理由〕

- ・サービスを低下させず経費を削減しスリムな運営体制を目指すためには、職員全員が費用対効果を常に意識した行動が必須であると考え、実施目標としました。

〔一次評価の理由〕

- ・事業者選定において、複数業者から見積書を徴収し競争入札を行い、業務の質を担保しつつ最も少ない経費で業務を執行し、経費削減を実現しています。
具体的な内容の主なものは、次のとおりです。
 - (1) 特に展覧会の委託関連の予算執行にあたっては、費用対効果の観点から委託内容を見直し、仕様書を再点検し、経費削減に努めました。
 - (2) 事業者選定においては、定められた基準等により契約額及び契約先は入札によって決定することになります。27年度も、特定の業者でなければ実施できない業務を除き、基準外の業務でも見積り合せを実施しました。この結果、事業の質を担保しつつ最も少ない経費で業務を実施しています。
- ・展覧会関連の出張については、スケジュールをまとめ、出張経路を最短に設定し、経費を削減しています。
- ・一部の案内パンフレットについては、印刷業務委託ではなく、手刷りで作成することで、より少ない経費で業務を執行しています。
- ・事務用品についても在庫の整理を実施しながら、必要な物の調達を行っています。

〔次年度への課題〕

- ・電気使用量や水道使用量については天候や観覧者数等に影響されやすいが、業務を執行していく中で、無駄な使用を抑えるという意識付けを引き続き職員間で行っていくことで、実施目標に近づけていけるようにしていきます。
- ・業務を執行していく中で費用を減らしていくことはもちろんですが、同じ費用の中でいかにして最大限の効果を発揮できるようにするかを計画段階や業務を執行していく中で継続して考えていきます。